

# 泥仕合の教官ゲバ

授業が大切なが、学生を新聞するところが大切なのか。法務授業が完全に行なえないという支那の授業再開をめぐる東京教育大学(高島学長代行)の教官の内輪モノは、「これが大学内でのことか」と首をかしげられる程だ。授業を受ける学生を擁護する方法などについて、学長代行派が「難題」ともいえるべきしい再開条件を突きつける。文学部が「交渉のたびに、まるでゆすりのように条件をつりあげるとする。すると学長代行側の交渉はそれと認めるとともに「絶対的でない条件をどうした」と聞き取る。学生は「このままでは政治争いのための新聞争い。お互いが出した『授業計画』は三日の評議会、最終調整されるが、動向は「こちらが本学文学部授業」「こちらが元祖文学部授業」と主張する。争いになりかねない。このままでは学生の「呼吸を合戦」が懸念だ。

## 東教大文学部



機動隊によって門の外へ出される文学部の学生(9月16日)

# 学生検問が先決 とにかかく授業再開

代行側  
反対側

「教授会が授業をやるといっているが、別当する学長がいない」と(文学部A教授)。「この条件は、連中が絶対的でないものを集めたんだ」と(学部B教授)。「これは文学部の授業再開決定に際し、高島学長代行が示した『三要件四条件』をめぐっての二つの反応。条件というのは『文学部

教授会が行なってきた大学当局批判を自己批判し、現行行なっている検問(警備隊を遣いたむ)とない学生が行入権を出し、教授が門に立ち止まらざるに協力せよ」という趣旨のものだが、従来「検問は学生の人身権侵害」と公言してきた文学部にとっては「授業は行かない」といわれたまうなもので、カンカンに怒った。同大学では、筑波研究所都市への移動問題から、今季の教官が異なり、文学部教授会(百三人のうち多数派は、今季の中でも学長代行批判派の集団。A教授は、その文学部の評議員である。対するB教授は文学部では少数派の代行派。「ロックアウト下では授業しない。解除されても学生の合意なしに再開しない」という文学部教授会決定に反発して脱退した二十八人の教官の一人で、代行のフレインとして、学内要職についている。

この日教授ら二十八人が、理事部は「他の他学部の代行派を結集し

て、文学部教授会報酬上げを止めれば、同じく本部以外の他学部の反対側は「文学部支援の声門」を出し、いざいざ。

「初めに述べたのは教授会側。『原則的検問は認めない』『学内警察維持を拒否する』『二十八人の教授会内での取扱いも考慮する』——と、代行側の要求を少しづつのみ、兼務には代行側が主張した『評議会授業計画臨時小委員会』(九月二十七日)という土俵に登った。

両者がそれぞれ案をもつて調整に臨み、久方ぶりに調整した。だが、もともとは「二十八人が要求を下げて調整するな」という教授会側に対し、代行側は二十八人は「自己批判授業の再開は論議の夜帳。われわれの側に同意するはかたまり」と高姿勢。とく二十八人の中でも「ワシ派」といわれる十数人は「閉会し、下を準備したことを目録に示し、わたくしは『学長室のユルマンを止めろ』と学長室にテ

「六月二十日からの文学部教官の授業(二十八人のもの)を無原状し、十月はしめからの授業をこれに上乗せする」という、結論を出した。

これをめぐって両派はまた代行側が「文学部検問。文学部教官が断力しない場合、学外から非常動調動をいれてやる」と解釈するのに対し、教授会側は「『原則上』積み」の意味は「代行案に文学部案を預かる意味だ」とまるで正反対の解釈。

結局教授会側は「自己批判はしない。文学部は授業もする」と一紙して決断を明かしたが、問題は学生も入場。

代行側は「法的にも文学部の授業は再開のもの」と認めないし、検問を文学部「責任しない」というのに対し、教授会側は「検問は原則的に認めないが現行のは最善でない。特別入構完全学生に交付する。検問問題はまず授業が先決」というのに対し、代行側は「責任が明確。無条件に拒否」と検問問題を先決条件としてゆすり、無出しに攻めた。

### カケ引きだけが横行

この数日の話し合い、お互いの疑念を消した。だが、理事部の小寺副学部長は「行政になれない教官が、政治的センスの教官にかか向かわれているの。平時のセンスをやるからダメなんだ」と教授会側に向かいながら、事務職員の側では「どちらもちょうど、師はまける。感情に定まる。変なカケとキだけが行」と手書きの批判もあり、ある大学

「元祖」「本家」とシンジ、ウラぎの争いとなるのは必至。九月三十日には日共系の学生が中心となってストを解除したものの、はたして学生がどういう反応に出るか。

10/3  
5D  
13版  
14版 = (47)